

カワカブ外巡礼の今：巡礼路の変化に焦点をあてて

スナチヤシ（スナチャシ）

1. はじめに

カワカブ（6740m）は、横断山脈に属し、中国雲南省迪慶（デチェン）チベット族自治州（以下、デチェンと称する）に位置する。京都大学学士山岳会、中国登山協会、雲南省体育運動委員会による日中合同登山隊が編成され、1989年、1990年、1996年の3度にわたってカワカブの登山活動が行われ、2度目の登山では17人の隊員が雪崩で命を落とすという中国の登山史上最悪とも言われる遭難を起こした。

近年、未踏峰登山の対象とされてきた一方で、カワカブはチベット仏教徒およびボン教徒の聖山として信仰されている。仏教が梅里雪山の周辺に伝わる以前、カワカブは本来、ボン教の聖山であった。カワカブには、9つの頭と18本の腕を有するロンツェン・カワカブと呼ばれる鬼神が住んでおり、8世紀にチベット仏教ニンマ派の開祖グルリンポチェがこれを降伏させ、仏教の守護神ネンチン・カワカブにしたと伝えられている（郭2012 pp.235-236）。聖山を回る行為は、チベット仏教において非常に重要な行為とされ、カイラスの巡礼は非常に有名であるが、カワカブにも多くのチベット人が巡礼に訪れる。カワカブの巡礼は、13世紀には既に行なわれていたということがガマバシの記した巡礼指南書『絨贊閃身卡瓦格博頌』（ロンツェン・カワカブの頌歌）の記述から分かっている（郭2012 p.427）。また、ロンツェン・カワカブの頌歌では、カワカブの巡礼は死後に輪廻転生を脱して、極楽へ行くためのものであると記述されている。

カワカブの生年は未年であるとされている。2015年は12年に一度のカワカブ大巡礼の年である。カワカブの巡礼は、内巡礼と外巡礼の二種類がある。内巡礼は徳欽県内の重要な聖地を回るものである。外巡礼は、雲南省とチベット自治区を跨るカワカブを一周するものである。これまで、カワカブの外巡礼に関しては、小林（2006）や郭（2012）によって報告されてきた。しかし、ここ

数年における巡礼の記録は報告されていない。巡礼路周辺の変化は大きく、かつては全行程徒歩によるものであったが、現在では巡礼の半分以上が、自動車およびバイクを利用することが可能となっている。カワカブの外巡礼の現状を把握するために、2015年10月19日から23日の5日間にかけて、徳欽県明永村出身の5名の比較的年齢層の若い巡礼者（20代4人、30代1人）と共に、カワカブの外巡礼を行った。巡礼路の位置情報はGPS（Garmin社、etrex VISTA HCx）によって記録した。取得した位置情報を基に、QGIS version 2.8.2及びR version 3.1.0を用いて、巡礼路の地図と断面図を作成した（図1, 2）。行動記録、及び、地図上の地名に関しては、小林（2006）に基づく。本稿では、2015年の巡礼路に関する最新情報を記すとともに、巡礼を取り巻く環境とカワカブへの信仰の変化について報告する。

2. 行動記録

[2015-10-19]

7:00 明永村 - 8:00 徳欽 - 9:30 羊咱 - 11:30 ヨンジュドンヤ - 6:15 ドケラツァ

車で明永村を出発する。徳欽で食料を購入後、巡礼開始の村、羊咱に到着する。羊咱から巡礼第一の峠であるヨンジュドンヤまでは、現在では車で上がれる。巡礼に必需品である竹の杖は、本来ドケラを越えた先で採取していた。しかし、今では樹木の伐採は禁止されているため、羊咱のチェックポストで供給されるようになっている。巡礼路上には、30分も歩けば、宿泊もできるようになっている売店がある。これだけ売店が多いのは、巡礼者の多い未年だけである。初日は平坦な道で、日が落ちる直前にドケラの手前のカール地形にあるドケラツァ（3800m）に到着する。

[2015-10-20]

8:00 ドケラツァ - 11:00 ドケラ - 17:00 チュナトン
ドケラ付近には多くのルンタが柵引いていた

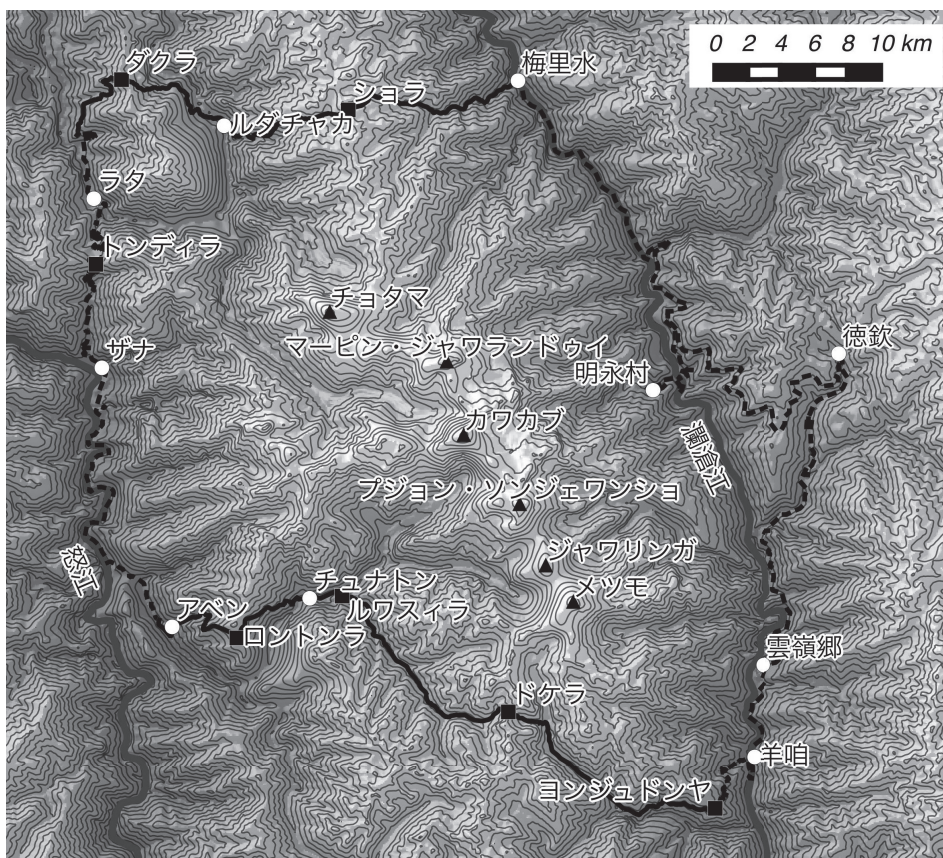


図1 カワカブ外巡礼地図

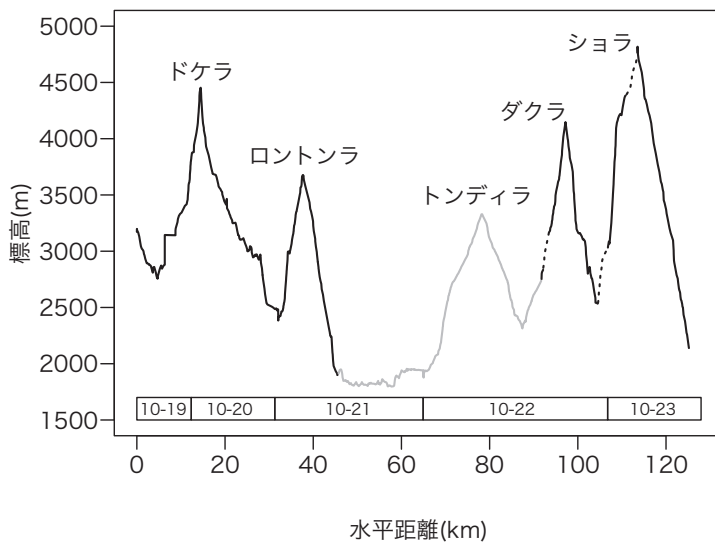


図2 断面図



写真1 数多くのルンタが棚引くドケラ峠



写真2 チベット自治区側から見た梅里雪山



写真3 土石流地帯デュケ



写真4 日没前のチョタマ



写真5 雲南省側から見たシュラ峠



写真6 巡礼路に捨てられたゴミ

(写真1)。ドケラからチュナトンに向かう途中には、死者を祀る聖地ルワスイラがあり、多くの遺品が置かれている。チュナトンに到着するも、巡礼者の数が多すぎるが故に、宿泊地が見つからない。売店の倉庫を貸してもらい寝床とする。

[2015-10-21]

7:30 チュナトン - 11:00 ロントラ - 13:00 アベン村 - 14:30 車 - 18:00 ザナ

峠ロントラまではひたすら登りである。ロントラからはカワカブやメツモなどの背後が見える(写真2)。峠下にはネチャ(聖水)があり、ここでお祈りし、峠でルンタをはる。アベン村で車に乗り、サルウィン川沿いにザナまで移動する予定だったが、ここも巡礼者が多く、売店の人は2日ほど並ばないと乗れないと言う。村の下の公道まで降り、ザナに向かって歩きながら、空きの車を探すことにする。1時間ほど歩くと運良く、車を見つめることができた。サルウィン川の支流には、絶壁に真言や仏の彫り物がある。ザナまでの道には、デケと呼ばれる土石流地帯がある(写真3)。デケでは、車は一台ずつしか通れない幅であるが、地元でない青海省の車が譲らず渋滞を起こす。予定よりも2時間遅くザナに到着する。ザナの入り口で公安の検査がある。ザナは大きな町で、ホテル、レストラン、そして、ラマ(チベット版ディスコ)まである。

[2015-10-22]

8:30 ザナ - 車 - 10:30 ダクラ手前の売店 - 12:00 ダクラ - 20:00 ウィチュ - 21:00 上部の売店(村名不明)

ザナから車に乗り、峠トンディラを越える。ザナの出口でも公安の検査がある。下車後、30分で峠への登り始めの最初の売店につく。11:00頃、昨晚、ラマで踊りすぎ足が痛いと言った同行者が、バイク乗ろうと仕切りに言い始めたところで、上からバイクが3台やってくる。同じく靴ずれで足が痛む私と、もう一人の同行者と共にダクラ手前までバイクに乗ることにする。まだ、上に行けるはずだが、峠よりずいぶん下の方で降ろされる。ダクラからの下りの途中、太陽が落ちる前にチョタマが見える(写真4)。真っ暗になってからウィチュに到着する。そこで食事をとり、6人ともバイクに乗り、標高500mほど上がったところの売

店で宿泊する。

[2015-10-23]

7:00 出発 - 12:00 シュラ - 18:30 梅里水 - 21:00 明永村

朝食をとらずに、水切れの状態では尾根筋を歩き脱水症状を起こす。4時間ほど歩くが、明らかに他の人達のペースに着いていけないため、標高4200mほどの地点からシュラまで、バイクに乗る。シュラの自治区側には雪がないが、雲南側は雪が付いている(写真5)。峠にははられるルンタの数は巡礼者の数を反映するが、ドケラに比べるとかなり少ない。ひたすら水線沿いに下る。梅里水に着くころには暗くなる。瀾滄江の出合には明永の車が待っており、車で明永村へ戻る。

3. 巡礼を取り巻く環境の変化

3.1 巡礼路の交通事情の変化とその影響

車とバイクを利用することで、巡礼はかつてよりはるかに楽になった。今回の巡礼は、ジャジンなどの聖地に立ち寄ることはなく、一周で228kmであった。梅里水から羊哨までの瀾滄江側はかつてから車道が通っており、水平距離にして約100kmである。それを除く巡礼路は、少なくとも徒歩の必要性があった。しかし、現在では、サルウィン川沿いに舗装はされていないものの車道ができ、水平距離にして約50kmは車で移動が可能となり、この道を歩く巡礼者を見かけることはなかった(図2)。今回の巡礼で徒歩だった水平距離は73kmと一周の3割程度であった。

ヨンジュシートンを経由すれば、今では大きな峠(ドケラやシュラ)を迂回することになるが車で外巡礼を行うことも可能である。かつてからそうだが、ダクラとシュラを越える巡礼路を歩く人は、基本的に徳欽のチベット人である。自治区や青海省から来た巡礼者は、ザナから車に乗り続けて、左貢を経て、大きく峠を迂回する形で、巡礼を完結させる。

巡礼路の至る所に売店ができていますが、売られている商品の荷揚には、バイクが使用されている。バイクで巡礼を行う巡礼者も数組いた。バイクは荷揚げだけでなく、巡礼者を運ぶタクシーの機能も果たしている。筆者も今回の巡礼で3回、バイクを利用した。

徳欽の多くのチベット人は、今では他の中国都市部と同じように職場に出勤しているため、かつてのように全て徒歩での外巡礼を行うほどの長期休暇をとることはできない。また、明永村のように農村部においても、巡礼適期である10月はブドウ、トウモロコシの収穫に次ぐ秋作の耕起や播種と農繁期となっている（田中と白瑪，2014）。今では筆者が行った巡礼と同じように、巡礼路の一部で車を利用すれば、巡礼に要する平均的な日数は5日しか要しないため、車はそのような時間的制約を解消する機能を果たしている。本来、厳しいはずだった巡礼は、巡礼路の整備と、装備の改善によって、手軽なものとなり、頻繁に巡礼に出かける人が増えたことによって、巡礼に対する意識の変化が起きている可能性が示唆されている（白瑪 2014）。実際、徳欽のチベット人の中には、この一年で3回外巡礼を行った人もいた。そこで、車を利用した巡礼に対する意識について、明永村と徳欽県の20から50歳代のチベット人10人に聞き取りを行った。車での巡礼の是非はおおよそ半々であった。車で回ろうとも、カワカブを回ることに変わらぬという意見と、徒歩で回らなければ巡礼としての意味がないという意見である。聖山を回る巡礼は転山と呼ばれる。扎西尼瑪（2015）によると、転山を通じて、肉体自体が自然の中で修行を積むことで功德を得ることができると考えられている。また、伝統的な巡礼路には至る所に聖地があるが、車での巡礼では、これらを基本的に回ることはできない。故に、扎西尼瑪によると、功德が少なくなると主張するラマもいた。ただ、健康上の理由などで徒歩での巡礼が困難な者もいるため、車の利用は全否定できるものではないとされる。

3.2 巡礼路の聖地に関して

ドケラやシュラのような大きな峠以外にも、ネチャ（聖水）が流れる川、ツァンパ、石灰、数珠、そして、アクセサリーなどが積まれた岩や木といった聖地が多く存在する。実は、それらが本当に昔からあった聖地であったかどうかは判断できない。一例として、明永村の事例を挙げたい。聖地には、自分自身が身につけていたアクセサリー、衣服、石、そしてお金などを置く習慣がある（郭 2012 p.446）。明永村の蓮華寺に行く道中にも、数

珠や服が掛かっている樹木がある。しかし、明永村の人によると、本来、そこは聖地でもないところであるが、いつの頃からか誰かがモノを置いていき、それに追従して外の巡礼者が置いていくようになったそうだ。今では、外地の巡礼者にとっては、聖地のような場所になっている。外巡礼も同じように、いたるところにツァンパや石灰が積まれた聖地と思しき場所が存在するが、実は、誰か一人がツァンパを積むと、他の巡礼者もツァンパを積むという構図が存在するのかもしれない。

3.3 巡礼路のゴミ問題

巡礼路には多くのゴミが散乱していた（写真6）。巡礼路にはところどころにゴミ箱が設置されているが、ゴミ箱を利用する巡礼者は極めて少なく、効果は顕著ではない。梅里雪山景区管理局は、10月15日から26日の間に、巡礼路のゴミ回収を行ったが、150トンのゴミを回収したと報告されている（雲南網 2015）。

4. おわりに

以上、カワカブの外巡礼に関する最新の情報を報告した。巡礼路の整備による日程の短縮は、チベット仏教徒およびボン教徒の外巡礼へ出かけるハードルを下げたといえる。また、漢族の旅行者もチベット人ガイドの有無の違いはあるが、数グループ見られた。雨崩や明永を回るカワカブの内巡礼は今では漢族のトレッキングルートとなっているが、外巡礼も徐々にその人気を得てきているようである。巡礼者や観光客の増加は、今後の巡礼へさらに大きな影響を与えるかもしれない。様々な聖地が巡礼路に点在するが、伝統的な巡礼路を歩く人が少なくなってきた今、聖地に関する情報を記録する必要性もあると考えられる。次回は、異なる年齢層の巡礼者に同行してもらい、ジャジンや他の聖地の探求を行いたい。

謝辞

本論文を作成するにあたり、巡礼に同行して頂いた明永村の皆さまに感謝申し上げます。

参考文献

（日本語）
小林尚礼：梅里雪山17人の友を探して。山と溪

谷社. 2006.

田中貴, 白瑪次木: 世界の農業は今、中国雲南省
デチェン・チベット自治州の農業—梅里雪山
のふもと, 明永村の事例—. 農業 1588: 56-
62, 2014.

白瑪次木: カワカブ信仰についての考察. 同志社
大学社会学部卒業論文. 2014.

(中国語)

郭浄: 雪山之書. 雲南人民出版社. 中国雲南省.
2012.

扎西尼瑪: 卡瓦格博轉山路の対話. 中国国家地理
662:116-127, 2015.

雲南網: 400 余人次参与梅里雪山外転経道清潔行
動 清理残留垃圾 150 吨. 2015. [http://society.
yunnan.cn/html/2015-10/28/content_3983080.htm](http://society.yunnan.cn/html/2015-10/28/content_3983080.htm)

Summary

The Present Situation of the Kawa Karpo Kora Circuit: Focusing on the Changing Pilgrimage Route

Sonam Tashi

Kawa Karpo is one of the sacred mountains for either Tibetan Buddhism or Bon. The Kawa Karpo Kora circuit has a more than 600-year history. In the past, the pilgrims have to go on the Kawa Karpo Kora circuit on foot. However, roadways have been constructed in some parts of the pilgrimage route in several years. The drastic change in the route conditions may impact on the environments and consciousness of pilgrims. The purpose of this study is to investigate the present situations of pilgrimage route and its influence on Tibetan Buddhism pilgrims' way of thinking and the surrounding environments. This study finds horizontal distance of roadway accounted for approximately 70% of the whole present pilgrimage route. Vehicle utilization makes the pilgrimage easier than before, and pilgrims are forced to pass through sacred places on the traditional pilgrimage route. Therefore, local Tibetan has a controversy issue whether the pilgrimage by car is right or wrong for accumulating virtuous deeds. Kawa Karpo Kora circuit is now gaining popularity for travelers of Han people. These factors may influence what the Kawa Karpo Kora circuit should be in future.